

タイ王国チュラーロンコーン大学での講義報告 —日本の言葉と文化を伝えるということ—



海外交流

鴻野 知 暁*

Report on Lectures at Chulalongkorn University in the Kingdom of Thailand:
Conveying the Language and Culture of Japan

Key Words: Thailand, Modern Japanese Literature, New Words

はじめに

タイ王国チュラーロンコーン大学日本語講座と大阪大学応用日本学講座(旧大阪外国語大学)の間では、20年以上、共同研究発表会・学術交流会が開かれてきた。両大学大学院生の発表や教員による講演などがなされ、大学院生がお互いを刺激し合える貴重な学びの場として交流の場として意義深いものである。この会は学生主導で準備・運営するものであり、学生にとって事務的な仕事の経験を積む機会にもなっている。時には大学院生のみならず学部生も参加して、「ワークショップ」として、あるテーマを設定し、日本語で議論の上、ポスターにして発表する(ポスターは当日に両大学の学生が協力して作成する!)という試みがなされたこともあった。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響により、一時的に交流会が止まっていた。2025年度は、チュラーロンコーン大学の学部生の授業(日本文化学)の一環として、大阪大学の教員が出張講義を行うことになった。チュラーロンコーン大学の学生の日本語力は非常に高く、日本人大学生対象の授業と同等に行えるということであった。今回の受講者は学部生であるため、「基本的な情報を授業のレポートなどにまとめる際、どのような文献やデータベースを参照したらよいか」ということの参考にもなるように努めた。本稿では2026年3月19日に行った講義の概要を報告する。

チュラーロンコーン大学にて

講義に先立ち、大阪大学応用日本学講座の永原順子コース長より、本学大学院応用日本学コースについて、所属教員の専門分野、カリキュラム、入試情報についての説明があった。続いて、本学の渡部直也講師と鴻野が、それぞれ1時間の講義を行った。

講義1:「若者ことばの言語学的特徴」(渡部直也氏)

はじめに、現代の日本で使われている流行語として、「2025年上半期Z世代が選ぶトレンドランキング」が提示された。「エッホエッホ」、「ほんmoney」などという言葉がスクリーンに出ると、受講者の間から笑い声が起った。

続いて、新語が作られる方法について、「派生」「複合」「短縮」などのパターンに整理されることが、多くの具体例とともに示された。近年はSNSを中心に、たくさんの「若者ことば」が日々生まれていて、時には「日本語の乱れ」と言われることもある。しかし、新語の作られ方は昔から上記のパターンに従っており、その意味では、日本語という言語自体が乱れているわけではない、とまとめられた。

ここで、受講者によるグループワークが行われた。先の流行語について、SNSなどでどのような意味で使用されているか、また、その造語法について各グループで調べてもらい、発表してもらった。たとえば、「メロい」という新語について、「グロい」と類似の方法で、語の短縮と形容詞化によって作られたということが的確に発表された。「風呂キャン界限」(風呂に入らない人たち、の意)という表現は、受講者にとって特に面白く感じられたようであり、その表現が使われる場面・文脈をめぐって多くの発言がなされた。日本人の生活の中で、湯船に浸かるということが重要な意味を持つことが実感されたようである。



* Tomoaki KONO

1980年9月生まれ
東京大学大学院 総合文化研究科 言語情報
科学専攻 博士後期課程修了(2016年)
現在、大阪大学大学院 人文学研究科 応
用日本学講座 講師。博士(学術)

E-mail: t.kono.hmt@osaka-u.ac.jp

講義2：『伊豆の踊子』に見る近代日本の言葉と文化 (鴻野知曉)

本講義では、「伊豆の踊子」のあらすじを示しながら、小説の重要部分を引用しつつ、日本語の表現、登場人物の心情、当時の日本文化に関する説明を行った。併せて、5度目の映画化作品(1967年公開、監督：恩地日出夫、出演：内藤洋子、黒沢年男ほか)のDVDの一部を視聴することとした(この映画は小説の再現ではなく、独立して楽しめる作品と考えるのがよい)。

まず、「おどりこ」という言葉を聞いてどのようなイメージを抱くか、いったんこの小説からは離れて、受講者に自由に述べてもらった。①自分で歌を歌って踊るアイドル、②動画配信サイトで自分の踊った様子を投稿する人といった回答のほかに、③京都などで舞妓として働く人という回答もあった。それでは、この小説の「踊子」とはどのような存在だろうか。このことを調べるために、多数の百科事典・辞典・書籍・雑誌を収録したオンラインデータベース「JapanKnowledge Lib」¹⁾を受講者に紹介した。ここに収録されるもののうち、日本最大の国語辞典である『日本国語大辞典(第二版)』の記述を確認した。「(2)(口)旅をしながら、宿場、温泉場などで踊りをする女。多く、太鼓、三味線、踊り子で一団となっている。」という語義があり、ちょうど「伊豆の踊子」の本文が用例として挙がっている。ここで、「旅をしながら」という点がこの小説を読むにあたって重要であることを強調した。新しい客を求めて旅をする旅芸人は、村人にとっては外の世界からやってくる者であり、「歓迎され、畏怖され、差別される人びとであった」²⁾わけである(なおこのような日本社会の差別については、チューラーロンコーン大学の他の授業回でも触れられたとのことであった)。映画では、旅芸人に関する差別的背景が追加されて描かれ(これには、当時の時代背景がどのようなものかを、克明に視聴者に伝えるという意味合いがあるだろう)、さらに別の川端作品である「温泉宿」のエピソードが途中で差し込まれることで、当時の酌婦の置かれた苦しい状況が表されている。

さて、「伊豆の踊子」の「私」は、「書生」という肩書きである。書生は年齢としては現在の大学生くらいであるが、およそ、「①誰かの家に住まわせてもらって、家事などの手伝いをする。②限られた知的エ

リート層である(特に、「私」は一高生である)。③独特なファッションをしている。」といった特徴があると説明した。「JapanKnowledge Lib」の中で『日本大百科全書(ニッポニカ)』を参照し、「書生」の項目を受講者に見せた。中に、「書生独特の長羽織や朴歯(ほおば)の高下駄(たかげた)は一般にも普及した。」という記述がある。それでは本小説で「私」の身なりはどう書かれているか。「私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白(こんがすり)の着物に袴(はかま)をはき、学生カバンを肩にかけていた。(中略)朴歯(ほおば)の高下駄(たかげた)で天城を登ってきたのだった。」と、それこそ上から下まで、いかにも書生らしいファッションである。百聞は一見にしかずということで、映画を視聴。紺飛白の模様がどういうものかよくわかる。「私」がトンネルを通る時、高下駄の軽快な音がよく響く(この音に、オー！という声を受講者から上がった)。映画では、「私」が茶屋に入って型どおりの挨拶をただけなのに、おばあさんがおじいさんに「書生さんだよ、おじいさん」と紹介するシーンがある(小説には無い)。茶屋のおばあさんが、その服装からすぐに書生と知れたということであり、当時実際に書生独特のファッションはよく知られていたであろう。

重要な場面として、旅芸人一座がひどい雨の中で、座敷に呼ばれているシーンがある。「私」は音・声をたよりにして踊子たちの様子を推し量るしかない。映画ではここに「私」と「紙屋」との会話が追加されており、踊子一般の売春行為が示唆される(これも当時の時代背景をことさらに説明するためであろう)。小説では「太鼓の音が聞こえるたびに胸がほうと明るんだ。(中略)太鼓が止(や)むとたまらなかった。雨の音の底に私は沈み込んでしまった。」とある。太鼓の音が聞こえている間は、踊子と客とが二人きりになっていないということで安心できるが、太鼓の音が止むと、踊子がひどい目にあっていないか、「私」は心を痛めるのである。

その翌朝、浴場で「私」が踊子に会うシーン。小説では「若桐(わかぎり)のように足のよく伸びた白い裸身を眺めて、私は心に清水を感じ、ほうっと深い息を吐いてから、ことこと笑った。子供なんだ。(中略)私は朗らかな喜びでことことと笑い続けた。頭が拭われたように澄んできた。微笑がいつまでもとまらなかった。」とある。受講者に対して、なぜ「私」

は澄んだ気持ちになってことごとと笑ったのか、という問いかけをした。「浴場で、年頃の男女が会う」という意外な状況に理解が追いつかなかったのかもしれないが、難しい問いに感じられたようである。「前日の夜の『私』の心情を合わせて考えてみましょう」とヒントを出して、意見を求めた。「①踊子は自分の裸を隠そうとしないくらいに幼く、男性客の接待には関わらない年齢であること」、「②それを知って、昨夜の自分の悩みはむだな心配であったのだと安心するとともに、自然と笑いが出て来たということ」という二点について、よく理解してもらえた。

ストーリーを最後まで追ってから、小説全体から伝わってくることにについて考えてもらった。前述のとおり、「私」は踊子が存外に幼いことに気付くが、踊子への好意は変わらない。ただ、一高生の「私」にとって踊子が本格的な恋愛・求愛の対象として捉えられていたとは考えにくい。ところで、「私」は旅先で、踊子以外の多くの人々と出会い、そのやりとりは印象的である。たとえば、踊子の兄は、自分の境遇や家族についての痛ましい話(子供を二度死なせたことなど)をし、「私」は寄り添って聞いている。「私」は、踊子のみならず、旅芸人一座、年をとった人(小説では、最後に「私」が孫を連れた老女を世話する)といった弱い立場にある人々と触れ合い、分け隔てのない、心からの交流をしたのである。我々が「伊豆の踊子」から受けるしみじみとした、そしてさわやかな読後感はそのようなところから来るのではなかろうか。

おわりに：学生たちへのメッセージ

講義の最後に、最近私が体験したことを話した。

コロナ禍が明け、大阪大学の留学生を引率して国内旅行に出かけた時のこと。夕食の折、「私(=鴻野)の授業で、今、日本の近現代文学を語学的に読んでいるんだ」という話をしたら、留学生たちが次々と自分の読書体験を話してくれた。日本に来る前に川端康成の作品を英語で読んだという学生がいる。すると、『雪国』を読んでよくわからないところがあったから、先生、今度教えてください」という声がある。『源氏物語』をいつか原文で読んでみたいという学生もいる。様々な国からの留学生が、日本の文学に興味を持ち、語り合っている。私は、ほんとうに、文学は国境を越えると思った。



写真1：鴻野による講義の様子

この話をした後、チューラロンコーン大学の学生にメッセージを伝えた。「皆さんも日本の文学作品を読んでみてください。どのように感じるかは皆さんの自由です。そして、皆さんの感じたことを、日本人たちに話し、教えてあげてください。」

参考文献

- 1) <https://japanknowledge.com/library/> (2026年7月1日参照)。
 - 2) 福田アジオほか編(2000)『日本民俗大辞典 下』(吉川弘文館)、「旅芸人」の項目。
- ※「伊豆の踊子」の引用は『教科書で読む名作 伊豆の踊子・禽獣ほか』(ちくま文庫)によった。受講者に、このシリーズの他の作品も読んでほしいという意味を込めている。



写真2：バンコクのチャオプラヤー川から望む景色

謝辞

チュラーロンコーン大学の学生に講義を行うという貴重な機会を設けてくださった、チョムナード・シティサン先生をはじめとする同大学の先生方に心から御礼申し上げます。

